

# 令和5年度 山梨県立わかば支援学校 研究のまとめ

## 1 研究主題

知的障害特別支援学校における単元計画と評価について考える  
～指導と評価の一体化を目指して～

## 2 主題設定の理由

授業づくりにおいてはPDCAサイクルに沿って検証していくことが多いと思うが、1年間の研究活動ではPDCで終わってしまうことが多い。そのためせっかく時間を費やして研究を進めても、中々検証結果を次の計画に生かしきれないことがある。また、観点別評価を行う上で、端的かつ具体的な評価項目を設定する必要があるが、教育観や経験年数の差等の違いから、類似している実態の児童生徒であっても、担任によって評価項目の内容や表現が異なることがある。そこで「評価」から次の「目標」という部分に焦点を当て研究を進めることにした。

## 3 研究方法

1学期の研究では、評価者によって評価が変わるということが実感できるように、簡単な演習活動を行った。具体的には、研究推進部が国語と算数（数学）のねらいを3段階に分けてロールプレイした動画を視聴し評価項目を作成する活動を行った。その後、10名程度のグループに分かれ、集計した評価項目一覧を参考に意見交換を繰り返しながら、一つないし二つの評価項目を作成するグループ研究活動に取り組んだ。

2学期の研究では、夏季研修会で講師から受けた助言を参考にしながら「指導と評価の一体化」に焦点を当て、単元目標の細分化を行った。対象授業としては、全学部に通ずる国語と算数（数学）にした。理由としては、その他の教科等だと当該授業を担当していない教員が意見を出しにくいということや、個別で学習している国語や算数（数学）については、指導案を出すことなく授業を行っているため、教員個人の裁量に任されており、初めて特別支援教育に携わる教員の場合、周囲に相談できずに個人で悩むケースがあり、研究の題材にすれば相談する場を設けることができると考えたためである。また、国語や算数／数学であれば、長い期間を通して継続的に行っていく学習のため、どのタイミングでも研究での結果を般化させやすいと考えたからである。具体的な方法としては、シート（図1）を使用し、後期の個別の指導計画から国語もしくは算数（数学）の目標の一つ抜き出し、目標を段階的に細分化する活動を行った。このことによって、指導内容及び指導方法、教材等が目標に対して適切かどうか検証できるのではないかと考えた。

図1 研究シート

作成者		児生（小・中・高）年		
教科	国語，算数・数学	目標（1つ）（※1）		
評価	段階的な目標（※3）	使用した教材（※4）	学習の様子（※5）	授業評価（※6）
※2				
	最終的な目標＝（※1）がそのまま入る。			
<p>※1 後期指導計画から国語もしくは算数（数学）の目標1つを抜き出す。</p> <p>※2 ◎完璧 ○ほぼできている △学習中 ×停滞中（実態が異なるため評価基準は各自で設定）</p> <p>※3 ※1の目標に至るまでの段階的な目標（スモールステップ）を記述。（何段階かは特に指定しない）</p> <p>※4 可能な範囲で具体的に記載。プリントであってもその内容まで記載する。</p> <p>※5 学習評価を記載。個別の指導計画や通信表、指導要録への転記を想定</p> <p>※6 年間指導計画反省への転記を想定</p> <p>ねらい：現在指導中の内容・方法が目標に対しての指導に合っているか、客観的な視点で検証し自身の指導に役立てる。</p> <p>方法：各回事例提出者（2～3人）がこのシートを提出、それぞれの※2～※6に対しての意見交換会を実施（一人当たり10～20分？）する。ただし、早い時期の担当者は※5、※6が未記入である場合もある。</p> <p>その他：原案では記載できる量が限られてしまうので、枠の大きさ等については各自で調整しても構わない。</p> <p>データ保存時はファイル名を「学部と氏名」にして、研究フォルダ（教職員-07研究-2学期-〇月〇日）に保存。</p>				

#### 4 研究のまとめ

##### (1) 小学部

1学期の研究では、評価項目が評価者によって違うことを感じ、様々な見方があることが実感できたという意見が多く聞かれた。人によって着眼点や評価項目の文章の書き方が違っており、気が付かなかった項目立て、児童をみる視点が勉強になった。また、同じ事象でも人によって評価が異なることがわかり、多面的でより正確な評価ができるよう複数の教員間で評価を読み合わせて共有することの重要性を改めて感じた。グループ研究の後には、自分の評価の視点を見つめなおし、別の視点からの捉え方もあるということが分かったことで、日々の指導の中での児童に対する評価力の向上につながったと考える。一方で、児童の行動を評価する上で評価基準の立て方や評価の視点については、演習等を通して学ぶことができたが、評価項目を達成できた段階で次の目標を設定する難しさが課題として挙げられた。評価項目を細かく段階的に設定するためには、学習指導要領との照らし合わせと理解が必要である。学習の段階が進まない時があるが、そこでとどまるのではなく、各教科のそれぞれの段階の目標と内容の全体像を把握することで、目標への迫り方を柔軟に捉え学習内容の変更や指導法の工夫も意識しながら指導と評価を繰り返していくことの大切さを改めて感じた。

2学期の研究では、研究シートを用いたことで、対象児童にどのようなスモールステップで学習を進めるか計画を明確にでき、計画に対して自分の指導がどうであったかを振り返り、整理することができた。改めて学習の積み上げについて考える機会となったという意見が多く聞かれた。学部の教員全員が作成し発表したので発表者一人あたりの発表時間が短く、事例対象の児童の実態について、情報が少ない中で意見を出し合う難しさを感じた。より良い評価項目に基づい

たより良い評価をするためには、児童の実態把握が重要であり児童の実態の捉え方をさらに向上させることの必要性を感じたという意見も出された。

研究を進めていくにあたって、日々の授業において、資質・能力の3つの柱からなる目標を意識してバランスの良い学習に取り組んでいきたいと考えているが、3観点で評価できているのかは課題を感じるという意見も出された。日々の評価をどのように指導計画に反映し、授業の組み立てに活用していくのかということも課題にあがった。今日はできても環境が変わればできなくなったり、教材が異なればできなくなったりする。児童のどのような行動を「できた」と評価すれば良いのか見取ることが難しいという課題も挙がった。また、小学部では、感染症流行期においては、WindowsのアプリケーションWhiteboardを活用して研究会を実施した。初めてのWhiteboardの活用であったため、慣れない操作への戸惑いや使いこなせなかったとの意見もあり、一方的なやりとりになってしまい研究を深めることが難しかった。来年度は対面での研究会が多く実施できると良い。

## (2) 中学部

1学期の研究では、全員が同じ事例ビデオを見て評価項目を考えていたが、児童生徒の動きをどのように見たり、捉えたりしているのかが、人によって大きく違うことが分かったという意見が上がった。また、自分とは異なる視点を知ることができ、明日からの指導につなげていく上で参考になったという意見や、改めて教員間で指導のねらいや評価の観点の共通確認することの重要性を実感したという意見が多かった。研究での実践を通して、実際に通信表の評価項目を作っていく過程で確認すべきことを一人ひとりが気付けたのではないだろうか。

課題点としては、評価項目の立て方が3観点ではなく、診断的評価として項目を考える取り組みであったため、設定されたねらいに対して、どの観点で考えたらよいのか、どこまで細分化して考えたらよいのかが考えにくいという点であった。全員で共通の評価項目を考える際も、3観点のうち、どの観点に重点をおくべきか頭を悩ませてしまうことにつながった。研究の中で得た知識を通信表の評価項目を作成する際に生かしていくためにも、3観点での評価を考える機会とすればよかった。また、3観点それぞれの適切な書き方や考え方等を共通確認できるよう設定できれば、今後、評価項目を考える際に教員によって観点ごとの書き方のずれが生じにくくなっていったのかもしれない。

もう一つの課題点としては、事例の児童生徒の実態が明らかでなく、どのような過程を経て評価のタイミングを迎えているのかが分からなかったり、評価規準、基準の提示が明確でなく、何をもって評価をしているのか基準がなかったりする中で評価項目を考えることに難しさを感じる意見が多かった。評価項目を考えていく上で必要な情報や手順を具体的に提示できるよう、学部の研究部を始め、他学部の研究部員とも意見交換をし合い、学部に伝達できると良かった。

2学期の研究では、担当者の主観に偏りやすい国語・数学の授業について研究の場で共有することで、自身の指導方法や使用している教材について、もう一度見つめ直すことができたという意見が多かった。一人では答えが出せず悩んでいた事柄についても複数の視点から考えることで、幾つかの案が生み出され、解決に近づけていける時間となった。また、他の教員の授業の様子や組み立て方、生徒の実態の捉え方等を知り、新たな視点を学ぶ機会になったという意見も多く、個々の教員が指導方法の幅を広げ、より実態にあった授業を作り上げていくための時間を作れる

ことのできたのではないかと考える。研究推進部が提示したシートについても、国語・数学については、集団授業のように年間指導計画を作成しないため、後期の指導目標の達成に向けてどのような計画で進めていくのかを整理し、視覚化できる資料につながった。

課題点としては、生徒の実態がその場の説明だけでは捉えきれず、発表者の評価が本当に適切であるのか判断しにくいところがあったこと、「適切な評価ができていないのか」という視点を考えるよりも、発表者の学習内容や方法、スモールステップの踏み方を重視した検討会となっていたことが多くあげられた。研究を進める上で、テーマとなる「評価」について軸をおいた研究をしていくために、まずは、指導目標の設定で学習指導要領を読み込んでどのように指導目標を設定するのかということ、そして評価規準、基準の違いや立て方等を全体で学び、共有できる時間や書式が必要であるということを感じた。

### (3) 高等部

1学期の研究では、観る人によって評価項目が異なることを実感し、異なる視点を知ることができ、勉強になったという意見が多く出された。また、誰にとっても分かりやすい文章表記の作成は、保護者にとっても良い結果になるのではないかという意見も出された。研究の成果としては、どの授業においてもCT、STで学習活動のねらいや評価の観点を事前に共有してから、指導することが大切であると改めて確認することができたことである。教師間における評価のずれを曖昧な感覚的なものではなく、可視化された文字で確認することで、複数の目で観ていても必ずしも同じ観点で評価していない場合があることがわかり、改めて授業前の打ち合わせの重要性を学部として確認することができた。

2学期の研究の中で、実態が高い生徒であっても発達に凸凹があるため目標だてが難しいという意見があったが、研究シートをもとに、段階的な評価項目を考えることで実態に合った学びが定まっていくことを実感したという意見も多く出された。他には、国語・数学を取り上げたことによって、以前は指導内容や指導方法の悩みを一人で抱え込んでしまうことがあったが、今回の研究で様々なアドバイスをもらえたり、実態把握を再度確認出来たり等、不安の軽減になったとの感想も出された。個別であっても周囲と相談しながら進めていくという考え方を共有できたことは、研究を進めていくこと以外にも、教師の悩みを軽減させることができたという成果でもある。今後も継続して個別の授業であっても、相談し合える環境を整えていきたい。一方で課題としては、指導要領の活用である。「指導と評価の一体化」について事例を通して検証していったが、学習指導要領との照らし合わせをもっと前面に出していれば、評価の観点について教師間で有意義な意見交換もできたかもしれない。

今回の研究では、「評価の客観視」「学習指導要領との整合性」「自分自身の指導の可視化」等について考える良い機会となった。まずは、CTのみで指導する国語と数学に関しては、生徒の様子を良く知っている担任間での日々の相談や情報交換を意識的に行い、より良い指導方法を模索していきたい。また、ティームティーチングで行う集団授業については、授業者での指導案の事前確認をしっかりと行うことで、評価の観点を共有することができ、教師間での指導のずれを無くせるのではないかと考える。実践で活用するためにも、普段から教師間でPDCAサイクルを学習指導要領の段階や内容等と照らし合わせながら、日々の指導を高めていきたい。

#### (4) 全体

客観的な視点での評価項目の作成と段階的な目標設定の二つについて、研究活動を進めた。研究活動を充実させるために特に意見交換等を大切に、教員間で意見や情報の共有を活発に行える環境を設定することを意識した。本校には100人を超える教員がいるため、年齢や経験の差は大きく、1学期に実施した演習では同じ事例に対しても様々な異なる評価項目が出された。この事実を共有し、評価者によって評価自体が大きく変わることを感じる事ができたことは大きな成果であったと思う。さらに、教員各々が評価項目を作成する上での客観性を身に付ける機会となり、意見交換の場が設けられたことに対して、好意的な意見が各グループから挙げられた。こうした結果からも、研究を行う上での土台作りという点においても一定の成果を上げることができたと考える。

今回の研究では、学部毎に授業研究をおこなうという形ではなく、同一の課題について意見を出し合うという形で実施した。そのため各学部から出された成果と課題が似通ったものになったのも、学校全体で同じ方向で研究を進められたということを示すものである。特に成果としては「他者との実態の捉え方の違いを実感し、客観的評価設定について深く考えることができた」「自分自身の指導方法や内容について整理することができた」「適切な目標設定や指導方法についての悩みが相談できた」等である。経験や年齢が様々な集団において知識や情報の共有は、特に経験の少ない教師にとっては指導上の悩みを解消できるだけでなく、指導力向上に大いに役立つ。また、どんなに経験を積んでも客観的視野の獲得は難しい。意見交換を通して自分に無い視点を知ることができたのも、今後の指導に大きく影響すると思われる。一方で課題としては、「3観点別での評価項目作成であればもっと具体的にできた」ということである。今回の研究では、3観点での評価項目作成という部分を落としてしまったため、どのような方向で考えれば良いのかという混乱を招いてしまった。もう少し細かい設定を行っていれば、更に深く研究を進められる可能性があったと考えると残念である。また、学習指導要領の内容を研究の中でもっと取り入れながら進めていけば、わかりやすい段階的な目標設定に繋がったかもしれない。

今年度で「知的障害特別支援学校における単元計画と評価について考える ～指導と評価の一体化を目指して～」の研究は終了となるが、今回の成果と課題からも、今年度の研究を発展させた形で実施できると手ごたえを感じた。その時のためにも、今年度の研究の成果を日々の実践で検証していきたいと考える。